

女子教育に  
身を捧げた

福西志計子

第3回

文 児玉 享さん

裁縫学校から順正女学校へ

裁縫所で得ていた7円の月収で一家の家計を支えていた福西志計子、木村静は退職してからは、わずか2円を2人で分けるような苦難の時もあったという。彼女らがこのような道を選んだのも、信念に従って自由の境地で女子教育に尽くしたいという思いからであった。この時、志計子35歳、静45歳であった。

当時、高梁では、男子には中等教育への動きがみられたが、女子には皆無だった。すなわち、男子には明治12(1879)年に有終館が再建されて、館長として莊田賤夫(霜溪)を招き、明治14年7月成羽町に川上中学校が、12月高梁町に上房中学校が開校し、上房中学校では吉田寛治(藍関)が小学校と掛け持ちで漢字を教えていた。

女子に対する中等教育の必要を認めていない当時としては、この裁縫学校はいずれ消え去るか、うわさされていた。しかし学校は先生2人の熱意と

教会員の支持のもとに成長していった。授業では裁縫を教えるにとどまらず、それによって自活できる人材育成を目指し、小学校卒業(14歳)後の生徒を3年以上指導した。後年、卒業生は異口同音に、在校中の厳しかった実技教育と、その水準の高さを自覚して誇りとしたと語っている。生徒は次第に増加し、裁縫学校を創設して半年後の明治15年7月には校地の黒野宅を買い取り、校舎1棟を建て、同年秋には生徒は90人に達し、学校の基礎は固まっていた。

卒業生の山本充の回想文に、「熱心なクリスチャンたる師は授業の前に聖書の講義をなされて、精神的方面へ女子を導かれた為か、キリスト教反対者は勿論、町の多数の人は反対し迫害した。然し女僕とも言うべき福西先生はひたすら学校に力をお尽くしになり」と述べている。

この間、明治15年4月26日に高梁キリスト教会が16人で発足、福西、木村の2人も教会の有力メンバーとして活

躍した。しかし、昔からの宗教・生活を守ろうとする人々は、新しい考えやキリスト教への反発から、明治16・17年には教会に対し、激しい迫害事件を起こした。このような中においても、裁縫学校は動揺しなかった。

福西は、教養や徳性を養うには裁縫などの授業だけでは不足と感じ、文科の必要を痛感し、女学校を創ることを考えた。この思いを強くしたのは、明治16年に読んだマリー・ライオンの伝記であった。マリーは7歳で父を失った後、学問に励み、24歳で女子教育に熱心な学園に入学、卒業後13年間教師をするなかで、女子のための大学の創設を決意した。無関心や迫害と戦い、この計画に賛同する2・3人の紳士の資金援助を得て、40歳の時達成す

る。福西は自分の経歴、思いと重ね合わせて、神の啓示と感じ、女学校設立を決心した。

明治17年8月、京都から高梁教会に応援伝道に来た同志社女学校の藤田愛爾校長の賛意と励まし、森本介石牧師や後援者の賛同も得て、岡山教会の金森道倫牧師に相談と依頼をした。金森牧師の熱心な努力により、当時地方では得がたい女性の文学教師、神戸英和女学校(現神戸女学院)の、原とも女史を先生として招くことに成功、彼女が12月に着任した。

ここに念願がかない、明治18年1月7日、県下最初の女学校として、文科を持つ順正女学校が成立する。初代校長として、最初から後援を惜しまなかった柴原宗助が就任した。順正という校名は前述の吉田寛治の命名である。吉田は有終館で山田方谷に学び、江戸に遊学、高梁小学校の主任教諭となり、かつて福西・木村が上司として信頼していた先生である。



(次号へつづく)